

そして
負け方や受け身の
ほんとうに身についた人間が
人の世の悲しみや
苦しみに耐えて
ひと（他人）の胸の痛みを
心の底から理解できる
やさしい暖かい
人間になれるんです。

そういう悲しみに耐えた
暖かいこころの人間のことを
観音さま、仏さま、と

題材法話

龍谷大学の宗教部報に、吉川英治の「人生列車」という詩について、事務局長の平島義仁さんが語っておられます。

大変おもしろい内容なので紹介します。

『人生列車』

「発車駅の東京駅も知らず、横浜駅も覚えがない、丹那トンネルを過ぎた頃に薄目をあき、静岡辺でとつぜん「乗っていること」に気づく、そして名古屋の五分間停車ぐらいいからガラス越しの社会へきよきよろし始め「この列車はどこへ行くのか」と慌て出す。もしそういうお客が一人居たとしたら、辺りの乗客は吹き出すに極まっている。無知を憐れむにちがいない。ところがお客は、全部の乗客がそれなのだ。」

重ね合わせた詩です。

○人生の流れ

まず「発車駅の東京駅も知らず」とは人生で言えば人が生



まれたときのこと、確かに誰の意識はありせん。ない「というの」は幼年期がたりでしようか、ここでも自分の人生などには、ほとんど意識せずに過ぎました。

そして、「丹那トンネルを過ぎた頃に薄目をあき」とは少年期くらい頃で、よく生活を通して、学校の地域や人生というものを少し意識し始める頃です。つまり「薄目をあき」ということなので。

その後の「静岡辺でとつぜん「乗っていること」に気づく」というのは、青年期の充実期から終盤にさしかろうとする頃です。

北村新一郎さんが前号で書かれていましたが、今まで来るのが当然と思ってい

なる、という年代でもありません。

私もすでに何人かの同じ世代の友人を亡くしました。寂しいことが次第に多



くなり、その身近な友の死などを通して、自分自身とは遙か遠いところにあつた「死」という問題が、否応なしに眼前に現れてくるのです。

これまで生きてきたけれど、自分の意味は何だったのか、生きるの命はどこに向かつて、やつと人生という列車に「乗っていること」に気づくのです。

そして最後に「名古屋の五分間停車ぐらいいから」窓の外を必死で見回し、「この列車はどこへ行くのか」と慌て出す。

吉川英治は、「行き先も目的も知らぬまま乗ってきたとは滑稽な話で、そんなお客さんを見たなら周囲の乗客は、へなんと馬鹿な人か」と、憐れむことでしよう。

「一けれども、人生という列車にのっている乗客は、全部がそんな乗客なのだ」と結びます。

○人生に意味を持つ

この詩は、自分がこの世に生まれてきた本当の目的や生き



る意味、そして確かなのちの行き先、抛り所、無いこと、問うことの無い人生は、いくら長生きしても虚しい人生に終わってしまふと言うことを示唆しています。

本当に「人生はどこへ行くのか？」「終着駅は？」「では恐ろしいことです。」

「行き先が分からないまま人生の最後を迎える」ならば、どれほど不安でしょうか。

まさにその問題を解決してくださるのが、南無阿彌陀仏です。

今、幸いにして人として法に遇わせて頂いてます。

親鸞聖人は、本願力にあひぬればむなしくすぐるひとぞなきと、ご和讃に詠んでおられます。

「どこへ行くのか」ではなく、「待つている親がい

る」の世界を、互いに持たせて頂いて、共に味わわせて頂きたいと思ひます。

除夜会住職法話より